

大山寺の歴史

大山は人々が住み始めるようになったころから神道信仰の地であり、弥生時代（紀元前 300 年 - 西暦 300 年）には強力な神が住む場所としてあがめられていた。

552 年に百済から仏教が伝来され約 200 年を経て、大山寺は山岳崇拝と道教を採り入れた真言宗の一大信仰地となり修行者が数多く訪れた。865 年に天台宗別格本山、角磐山、大山寺として指定されるまでは、平安時代（794 年 - 1185 年）の間も真言宗が続いた。旅人と子どもを守る地蔵菩薩の顕現である大智明権現がこの山の公式の神となった。

江戸時代（1603 年 - 1867 年）初期には絶え間なく参拝者が訪れ、大きな家畜市場としても発展し、隠岐諸島から商品売りに来る者たちまでいた。1868 年に明治政府が設立されると、廃仏毀釈が実施された。これによって大山寺はじめ多くの寺院が破壊された。1875 年に大山寺号が廃絶され、寺領の多くが没収された。本堂には、もともと米子市内にあった大神山神社が移された。

1903 年に大山寺号は復活したが、42 あった僧房は 10 のみが残された。大山寺は収入源を失い、崇拝者たちも散り散りになってしまったため、寺を維持することは困難であった。現在はほんのいくつかの建築物のみが残っている。